

他者を尊重する自己本位 —夏目漱石の個人主義—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

ロンドンの深い霧のなかで迷子になったような気がした。いくら英文学に関する論文を読んでも頭に入らない。ひとり下宿の片隅に引きこもって陰鬱な日々を送っていた。

熊本にいた頃、夏目漱石（1867—1916）は文部省からイギリスへの留学を命じられた。さしたる目的もなく外国へ行っても国家の役に立つはずがない。それで断ろうとしたら留学の評価は文部省に任せればいいと上司に説得された。

それでも渡英後、後悔の念が津波のように押し寄せてきた。図書館をうろついて何のために本を読むのかわからなくなった。迷いに迷ったとき、救済の道は自分でつくるしかない気がついた。冷たい霧の彼方から、かすかな光が射してくる。

神経衰弱による新たな転機

漱石は現在の東京都新宿区喜久井町で裕福な名主の家の五男として生まれた。本名は金之助。誕生後まもなく明治維新を迎えて一家は没落し、末っ子の漱石は養子に出された。幼くして天然痘を患い、顔に痘痕が残ってコンプレックスを抱く。

養父母が離婚し、9歳で生家に戻った。しかし実父と養父の争いが絶えず複雑な家庭環境で育つ。府立一中、二松学舎、成立学舎を経て大学予備門（第一高等学校）に入学し、俳人として大成する正岡子規と出会う。漱石という筆名は子規から譲り受けた。中国の故事である漱石枕流に由来して

おり、石で口をすすぎ流れに枕すという負けん気の強い変わり者を意味している。

子規との友情を深める傍ら学問にも励み、とくに英語が抜群だった。東京帝国大学英文科に進み、優秀な成績で特待生に選ばれる。イギリス人教授の依頼

で『方丈記』の英訳をやり遂げ、英文学者としての将来を囑望された。この頃、明治政府による徴兵を免れるために北海道へ戸籍を移転する。

卒業後、柔道の大家である嘉納治五郎が校長を務める高等師範学校の英語教師となる。ところが近親者の相次ぐ病死や肺結核の発覚などで厭世的な神経衰弱に陥り、2年で辞職。東京から逃れるように子規の母校である愛媛県の旧制松山中学に赴任する。後年『坊っちゃん』の舞台として有名になった松山市では脊椎カリエスで療養中の子規と斬新な俳句づくりに精を出す。

松山から熊本県の第五高等学校に転任すると、のちに物理学者・随筆家として世に出る寺田寅彦に師事された。寺田の影響で漱石は科学的なものの見方に興味を持つ。在任中、貴族院書記官長の娘の中根鏡子と見合い結婚し、新居を構えた。

英語教育の研究を名目として1900年、文部省



夏目漱石

からイギリスへ派遣される。33歳の漱石は途方にくれて極度の神経衰弱に陥った。渡英して2年後に子規が亡くなったことを知らされる。孤独に悩み苦しなながらも自己を徹底的に省察する決定的な転機となった。新たな再生への手がかりを掴む。

天に則り私を去る心境

帰国後、神秘的な怪談を出版して話題を呼んだ小泉八雲ことラフカディオ・ハーンの後任として東京帝大英文科の講師となる。だが講義は不評で漱石の更迭を求める騒ぎになった。子規の遺志を受け継いで俳句誌『ホトトギス』を刊行していた高浜虚子は漱石の比類のない文才を見抜いて小説の執筆を依頼する。1905年、38歳で猫を語り部とする処女作『吾輩は猫である』を発表し、奇想天外な社会風刺で反響を呼ぶ。続く『坊っちゃん』『野分』も好評で帝国文学に『倫敦塔』、新小説に『草枕』、中央公論に『二百十日』を寄稿し、前例のない独創的な作風で一躍脚光を浴びた。

40歳で教職を離れ、朝日新聞に入社する。同紙に連載した『虞美人草』で漱石の名声は高まり、職業作家としての地位を確立していく。その反面、養父から金を無心され、煩わしい日々を送った。

漱石山房と呼ばれた早稲田南町の新居で毎週木曜日に門下生が集まる木曜会が開かれた。新進気鋭の作家・芥川龍之介からも参加し、牛鍋を囲んで談論風発する。漱石は初期3部作の『三四郎』『それから』『門』や『坑夫』『文鳥』『夢十夜』を執筆する一方、胃潰瘍を患い静養に訪れた伊豆の修善寺温泉で大量に吐血し、生死の境をさまよう。

何とか危機を脱した頃、文部省から文学博士号を授与するという通達が届いた。漱石は専門学務局長に宛てた書簡で「小生は今日まで、ただの夏目なにがしとして世を渡って参りましたし、これから先もやはり、ただの夏目なにがしで暮らしたい希望を持っております。従って私は博士の学位をいただきたくないのであります」と辞退する。

執筆活動を再開した漱石は『彼岸過迄』『行人』『こころ』の後期3部作を完成させ、自伝的要素の濃い『道草』を上梓する。しかし心身は蝕まれ、胃潰瘍に加えて痔や糖尿病や神経衰弱に悩まされた。そして『明暗』執筆中に胃潰瘍による内出血

を起こし、未完のまま49歳でこの世を去る。

晩年の漱石は則天去私と揮毫し、天に則り私を去るという心境に達していた。人間の我執、私欲、利己心を超える普遍的な境地をめざしていた。

国家権力の濫用を戒める

則天去私の原点は1914年に学習院で行われた講演『私の個人主義』で開示されている。漱石はイギリス留学以前の自己を他人本位と総括した。他人本位とは人真似とっていい。たとえば西洋人の尻馬に乗って空騒ぎする。むやみに片仮名を並べて得意がる。権威を楯にして空威張りする。漱石は「私が現にそれだった」と痛切に反省する。まるで孔雀の羽根をつけて歩いているようなものだから内心は不安でたまらない。実際に西洋文明に接して虚飾に充ちた他人本位の自己は崩壊する。「このとき私は初めて文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作り上げるほかに私を救う途はないのだと悟ったのです」と述懐している。そして浮き草のように漂う他人本位から自己本位という新たな地点へようやくたどり着く。

自己本位は自己中心主義と対極にある概念だ。漱石は自己の個性を尊重すると同時に他者の個性も尊重するのが自己本位もしくは個人主義の核心と説く。とくに権力と金力を容易に使えぬ立場にある上流階級の子弟は人格を磨き、倫理的な修養を積み重ねなければならない。「自分が右を向いているから、あいつが左を向いているのはけしからんというのは不都合じゃないか」と問いかけて「人格のない者がむやみに個性を発展しようとする」と他人を妨害する、権力を用いようとするを濫用に流れる、金力を使おうとすると社会の腐敗をもたらす」と「わがままな自由」を戒めている。

鋭い舌鋒は言論の自由を束縛する国家にも釘をさす。「個人主義を蹂躪しなければ国家が減びるようなことを唱道する者も少なくありません。けれどもそんな馬鹿げたことは決してありません」「国家的道徳というものとは個人的道徳に比べると、ずっと段の低いもののように見える」と反論する。

徒党を組まない個人主義は常に淋しさを孕んでいると漱石は述べている。反骨精神を貫いた文豪は無類の淋しがりやだった。